

映画『ハリーポッター』  
シリーズから考える**ピンク**の衣装

# 【研究動機】



第四作「ハリーポッターと炎のゴブレット」に登場するこのシーンのハーマイオニーのドレスが印象に残りこの衣装には強いメッセージ性があると予想し、ハリーポッターにおける衣装が表す意味を読み解きたいと思った

## 第4作「炎のゴブレット」

### クラムとのダンスパーティーのシーン

ファッションに気を遣わなかった彼女が突然ドレスアップして、周囲を驚かせる。

視聴者は彼女の衣服の変化によって、彼女の恋が目覚めたことに気付かされる。

この鮮やかなピンクのドレスが彼女が精神的に大人になったことを表すターニングポイントになっている。



# 【研究概要】

- ★映画の登場人物の衣装やファッションというのは、キャラクター設定等において重要な意味を持つ。
- ★この研究では、1990年代のイギリスが舞台の映画『ハリーポッター』シリーズのピンクの衣装に注目することでそれらの衣装が表している意味を考察する。
- ★併せてピンクという色の歴史についても調べる。

衣装を担当するジャーニー・ティマイムは、2020年1月14日のThe Leaky-Cauldron.orgのインタビューで、「She joined the franchise for the third film and immediately changed the look and feel of the costumes to suit the darker turn the story was taking. (ストーリーが重苦しい雰囲気になっていくのに合わせて、衣装の見え方やそこから想起される感情を当初予定していたものから変更しました)」と語っていることから、ハリーポッターシリーズで衣装が感情の流れに合わせて決定・制作されたことが垣間見える。

# 【研究手法】

- ◆ 映画「ハリーポッター」の情報をまとめる
  - ・配給会社・作品設定・その時代の流行ファッション等
  - ・比較のための同時代(1990年代)のファッション参考資料探し
- ◆ 対象キャラクターのピンクの衣装の切り抜き画像を抽出
  - ・時系列順に作品シーンの変化および対象キャラクターの人間関係を整理
- ◆ 原作小説作者のJ.Kローリングのジェンダー感や色に対する意識を調査
- ◆ 分析・考察
- ◆ 英国における女性ファッションの色について

# 【象徴されている場面】



## 第3作「アズカバンの囚人」

ヒッポグリフの処刑人登場シーンから最後まで



## 第4作「炎のゴブレット」

ホグワーツに向かう途中



## 第4作「炎のゴブレット」

クラムとのダンスパーティーのシーン



## 第5作「不死鳥の騎士団」

初めての闇の魔術に対する防衛術の授業



## 第5作「不死鳥の騎士団」

トレローニー先生をホグワーツから追い出そうとする



## 第5作「不死鳥の騎士団」

試験中にフレッドとジョージが教室で大爆発を起こすシーン



## 第4作「炎のゴブレット」

ホグワーツ特急の中でハリーと初めて  
出会うシーン



## 第4作「炎のゴブレット」

ハリーにダンスパーティーに誘われるが  
断るシーン



## 第4作「炎のゴブレット」

セドリックとダンスパーティーに参加



# 【ハリーポッターの登場人物と衣装の関係】

映画の中でピンクの衣服を着用しているキャラクターは必ずその前後のシーンでハリーまたはロンと揉め事を起こす

【例】

## 第4作「炎のゴブレット」

クラムとのダンスパーティーのシーン

➡この後ロンにダンスに誘われたかったハーマイオニーが不器用なロンに癪癢をおこし、ハリーにも八つ当たり



## 第5作「不死鳥の騎士団」

闇の魔術に対する防衛術の授業のシーン

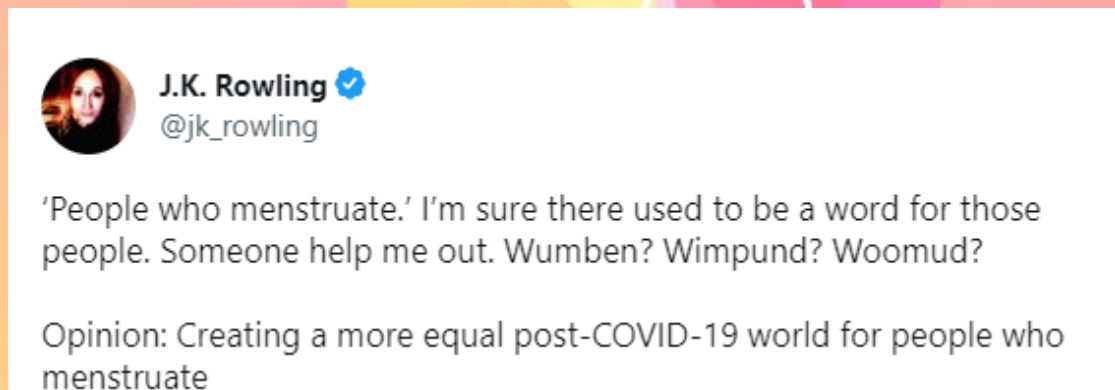
➡この後ハリーに都合の悪いことについて授業中に質問され、授業後に体罰を行う



# 【J.Kローリングのジェンダー意識と色】

## 【 J.Kローリングの発信例 】

- ・トランスジェンダー女性は女性ではない
  - ・トランスジェンダー女性を差別し、除外するフェミニストのツイートに「いいね」の反応をしている(Twitter)
- …等の発言からネット上で炎上。ハリーポッターの出演者からも批判を受ける。



# 【考察1】

ハリーポッターにおけるピンクの衣装を着ているキャラクターは、原作者のJ.Kローリングが女性特有の嫌味っぽさを感じているキャラクターであることを表現している

原作者J.Kローリングは、登場人物のドロレス・アンブリッジは自身が出会った「一目でもものすごく嫌い」だった教師からヒントを得たとPottermoreに記している(2015年)。少女っぽいピンクのアクセサリを好むアンブリッジを書き記している時、特にこの教師を思い浮かべたという。

このことからピンクという色に対してJ.Kローリングはネガティブなイメージを持ち、女性性を全面に出すようなキャラクターも同様に不快に感じていると思われる。



第5作「不死鳥の騎士団」

試験中にフレッドとジョージが教室で大爆発を起こすシーン

# 【女性色としてのピンク】

女の子のための性的差別的な色としてのピンクへの移行は、1930年代と40年代の市場の選択的プロセスを通じて徐々に生じた。

1953年、アイゼンハワーの妻マミー・アイゼンハワーが彼女の初のガウンとしてピンクのドレスを着たドワイト・アイゼンハワーの米国大統領就任式は、女の子と関連した色としてのピンクの連合の重要な転換点になったと考えられている。マミーの強いピンク好きの気持ちは、ピンクが女性の身に着けている色であるという公的認識につながった。

1957年のアメリカのミュージカル、ファニーフェイス(Funny Face)もまた女性との色合いを固める役割を果たした。

## 【考察2】

ピンク色の服はキャラクターが精神的に子供から大人に移り変わるターニングポイントで使われている

映画『ハリーポッター』シリーズにおいて主要な登場人物であるハーマイオニーはすべての巻に登場しており、ピンク色の服を着ているシーンも多数見受けられる。

彼女は第3作『アズカバンの囚人』中盤で初めてピンク色の衣装を着用した。

第4作『炎のゴブレット』ではピンクの衣装の着用回数が最も多く、前作までの子供らしい冒険物語に加えて、彼女の恋心が芽生えだした作品が第4作となっている。

タイトル	ハーマイオニーの ピンクの服の 着用回数
第3作:アズカバンの囚人	1
第4作:炎のゴブレット	8
第5作:不死鳥の騎士団	1
第6作:謎のプリンス	0
第7作:死の秘宝1	0
第8作:死の秘宝2	1

# 【ピンク色の歴史】

欧米での調査によると、ピンク色は、  
魅力、礼儀、感受性、優しさ、甘さ、子供時代、女性性、ロマンチック に  
最もよく関連する色

**19世紀**      イングランドで、ピンク色のリボンや装飾が  
若い男の子たちによって着用されていた。

**20世紀**      ピンク色が強く、明るく、より積極的になった。  
これは、退色しない化学染料が発明されたため。

ピンク色の新しい波の創造の先駆者は、  
イタリアのデザイナー  
Elsa Schiaparelli(1890-1973)であった。

1931年には、マゼンタに少量の白を混ぜた  
ショッキングピンクという新しい種類の色が作られた。

- ・AMBUSH(2023)ファッションで最も物議を醸す色の文化史
- ・Aflo(掲載年無し)「アーカイブ・オブ・ファッションー海外デザイナー編」
- ・FASHIONPRESS(2014)「Elsa Schiaparelli」

# 【エルザ・スキャパレリ(*Elsa Schiaparelli*)】

生年月日	1890年生まれ ココシャネルより7歳若い
死去年度	1973年 ココシャネル死去の2年後
出身	イタリア
性別	女性
活躍した年代	1930年代 1940年代…この時期、ココシャネルは長期 休職中
作風の特徴	ショッキングピンクをはじめとした 派手な色使い
世間的な評価	1930年代/1940年代を代表するデザイナー



スキャパレリはこの当時大流行したココ・シャネルに代表される男性風のデザインやモノトーンの色彩は好みでなかったらしく、ウエストを強調するデザインやショッキング・ピンクといった派手な色合いを提案した。

このため、シャネルはエルザをライバル視していた。



【代表作】



# 【現在でのピンク】

・第二次世界大戦後から女の子はピンク、男の子はブルーという固定観念が生まれ、この鮮やかな色はそれまで以上にジェンダーに結び付けられるようになったが、近年(特にこの5年間の間で)大胆でジェンダーニュートラルな色としてとらえられるようになってきている。

・また「ポリティカルピンク」という言葉が生まれ、最近の進化したピンクは世界中で起こっている政治的不安を解消する対抗手段としての役割を果たし、今の世代の若者にとってパワフルな色になり、ピンクはジェンダーを超えた反体制のシンボルとされている。

※ポリティカルピンク:目を見張るような色合いのフューシャやショッキングピンクのこと

AMBUSH(2023)「ファッションでもっとも物議を醸す色の文化史」

# 【参考文献】

- ・ワナー・ブラザーズ(2001ー2011)「ハリー・ポッター」シリーズ
- ・大坊 郁夫(1999)「衣服の社会心理的機能の役割」自己意識の心理学
- ・神山 進零(1998) 「被服の社会・心理的機能」被服の社会心理学的研究解
- ・小柴 朋子,田村 照子,永井 伸夫,綿貫 茂喜,森 由紀 (2010)  
「ファッションの情動性が人間の心理生理に与える影」服飾文化共同研究 報告
- ・中川 早苗(2011)「被服心理学へのいざない」日本衣服学会誌
- ・後藤妙子(2019)「服の色で、損する人、飛躍する人」星雲社
- ・蘆田裕史 (2021)「言葉と衣服」アダチプレス
- ・高田葉子 (2013)「アイデンティティとファッションの関連性についての考察」戸板女子短期大学研究年報
- ・HISOUR 芸術文化美術歴史(掲載年なし)「歴史と芸術におけるピンクの色」  
<https://www.hisour.com/ja/pink-color-in-history-and-art-26672/>
- ・BAZARR(2020)「エルザ・スキャパレリがデザインを生み出した経緯を辿る」  
<https://www.harpersbazaar.com/jp/fashion/fashion-column/a32898824/elsa-schiaparelli-how-i-came-up-with-my-first-ever-design-200620-lift1/>

・FASHIONPRESS(2014)「Elsa Schiaparelli 」

<https://www.fashion-press.net/brands/296>

・Aflo(掲載年無し)「アーカイブ・オブ・ファッションー海外デザイナー編」

<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/features/1078>

・LIFE INSIDER(2021)「ホグワーツの先生たちに関する22の事実」

<https://www.businessinsider.jp/post-229652>

・WIZARDING WORLD(掲載年無し)「J.KROWLING ARCHIVE」

<https://www.wizardingworld.com/>

ご清聴ありがとうございました